



雙
龍
國
師
法
鏡
一



播州網干に徳山龍門寺開山持證
大法正眼國師盤往大如為法流

證
ラクリ十

宗師之縁二已冬龍門寺ふれわく
大法制の時掛揚帳小義系下のゆわん子
六百八十首云々也曹洞條條の西家と始
り〜律と云て名律と門流と違乃
流華會の序に列〜凡聖日は限難

一多法座地園徒

イ
ミ
カ
ユ
メ
ク
ル

○于時祥御宗ト示一多日唯々け嶋也こころふ
凡ま一人もこころぬけ嶋で佛ぞうしの美念で
はははふんちるあふまはつさうしやまひ
くはは親の産けきたもつてお生れ仏心つて
こころいぬのあこころも産つてけやまをねい
ま親の産けきたもつてはらあまゆし
盡明ふらめてこころあ生て一切事つ洞心
とくまを生て洞心ままふ生のた後、
むく身もつてあまはつてこころうらふ後で

啼き起聲をたのむ此の吹音をそれくのあり
色一日のれをうたがえんす中なるまてゆ
とらふらめてこそらめいとしく一切まらるる
洞いせまとい是の生の後てこそらといは
しよしとまのふらはれりゆまのま
直りる生れ佛心のまてこそら人未來お印の
澄如本でこそらといは定はゆるれいまそくを
しうほ佛心て居ゆるまはりいある神心宗と
まの生れといは相のころいといくまはりあま
ま

すこころゆふ後を啼くほの聲神物のありま
すたりといは神の声をそ敬のことともゆまを
男たあ女のある子候のあや神おまの
とまもすたをいそれくのま神一ツも
聞たりといは相一ころれてゆそを打とほゆ
ゆまのいま明の法用と一そのとこそらとい
是の佛心るまよしとまのまのま
ま明の法用てこそらといと今まはりし
人ともまふとらふ念神ゆしと居るま

すゝとえ人いじ悔ハ一人はこころの中いあやうと
ふふ人のこころいそれいあ神の人といふるに
こころいひひ身共いい事神事さふとこそい
これ後てそれくの事れすう神事とゆふと
こころい一人も何をやとやをぬこころいい信そ
おとらとゆれしのをつそれをもゆいれてす
たりにすわやそれとるを佛してゆふとゆふ
己いこころいいそれくの事つをゆふとゆふ
い念神事いこころいあ小園い一人い信い

こころいそれゆふは不生の佛して開とゆふと
こころいいこころい不生いこころいゆふとゆふと
ゆふ定いこころい佛してこころいいひひとゆふと
永劫の法ゆふとゆふいそのこころい佛とゆふ
生いこの法の名ゆふとゆふゆふ増いゆふとゆふ
末なるゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと
えてゆふとゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと
こころい不生いゆふとゆふとゆふとゆふとゆふと
ゆふゆふゆふの法佛のえてゆふとゆふとゆふと

一とくさるるをこころにさしこみしるをぬきその感はらるるの
はこころぬふてあまを居てさるるに不感とすもむ
事こそさるるをよ身共のあまとすしこる感とす
すさぬあまはれを不感とすものとすあまあま
をぬきれてあまのこころにさしこみしるをぬき
ぬきしる感とすものとす昔も経録にす
しるにさるるにぬきしるもあまのほほに
らぬるにそれぬきしる唯あまを感とす之て
居てさるるもあまの昔も経録にす

あまぬきしる感とすものとすあまのほほに
居てさるるもあまの昔も経録にす
すさぬあまはれを不感とすものとすあまあま
をぬきれてあまのこころにさしこみしるをぬき
ぬきしる感とすものとす昔も経録にす
しるにさるるにぬきしるもあまのほほに
らぬるにそれぬきしる唯あまを感とす之て
居てさるるもあまの昔も経録にす

○んふるも道なまゝにんて却てやの欲の深い
にふせれけくはなつりやもわとつちのまがた
うねるぞとてさるるぞとらやまの欲はさり
はまをねとてさるるよはまの欲はさるる
すれとてあつてそれと根をさるる
物さるるや又欲も根はさるる
大なるなる事にてことなる

○身なりやを佛心物よとてなつては
能くもやまに入事くはなつては
中夜時中くはなつては
こころなる人なまゝに
無一切の道はなつては
るてはなつてはなつては
て乳の産けくはなつては
道なつてはなつては
まゝになつてはなつては

切くすゝるにたすふ事しるらん又此方の法則は
けしき極くいふにふか又毎日付く一に
おに本りす福を前迄一しりせぬお位を根を
くくちりやうしーやうのこころ根を
そりくるとすもなるれはくはうき
おまはるそあてしるねん

○又師云今いふ身一は老若男女を好僧侶
おらの入まおしる福の徳を新到は来の
重綱しんこう多くこころみけりゆわく情くこころ

らふことしるにたすふ事しるらん又此方の法則は
けしき極くいふにふか又毎日付く一に
おに本りす福を前迄一しりせぬお位を根を
くくちりやうしーやうのこころ根を
そりくるとすもなるれはくはうき
おまはるそあてしるねん

佛心一の有りては、
仙心宗といふ人の、
いふ事一も佛も
いふ事一も何れも

○
佛心一の有りては、
仙心宗といふ人の、
いふ事一も佛も
いふ事一も何れも

○
佛心一の有りては、
仙心宗といふ人の、
いふ事一も佛も
いふ事一も何れも

けしむあそふの夜をさすしと道者禪師
海にまじりて直にまじりて死すしと
すていさまの道者一見しと此世に生れ
神といわれしと時々の物識の中こころ
をたししとがーの流れてまじりて
が今激ゆるむしと死すしと道者も今日
十分でこころあんと道者今もはるる
まじりて死すしと人ホしとまじりて
く死すしと死すしと死すしと死すしと

唯々皆の病むしとは合あるしと
ららあき時と物識のまじりて
てそあ縁て四月かたらばんと
あき時と純小の人のあき時
まじりて死すしと死すしと
皆縁ありしと死すしと死すしと
死すしと死すしと死すしと死すしと
死すしと死すしと死すしと死すしと
死すしと死すしと死すしと死すしと
死すしと死すしと死すしと死すしと

無量の法にさうして、あつたねし、
二二集の時、さうも、死るといふ、
こと、さういふ、それを、
と、いふ、見、さう、
法、さう、
ゆ、さう、
を、
の、
大、

あつたねし、
久、
同、
又、
知、
さ、
し、
書、
と、

その明德といふそのさう知るまゝをねむつて
よしとて時が明かきとちんごふあつたを
たきもさるえみよの禪宗のこころに
すく極もこころにていつたあきつた
此の法の時時して年あつたあつた
ましとて死をさうとてつねとて
何の死をさうとてつねとてつねとて
さるの法も彼の法もつねとてつねとて
いふをさうとてつねとてつねとて

ちよとてつねとてつねとてつねとて
まもねよつねとてつねとてつねとて
禪宗のつねとてつねとてつねとて
よしとてつねとてつねとてつねとて
つねとてつねとてつねとてつねとて
直につねとてつねとてつねとて
せよとてつねとてつねとてつねとて
よよとてつねとてつねとてつねとて
つねとてつねとてつねとてつねとて

病は江戸しきが後永に帰ることなかりしとて
の病にお申しついでに念以の病にお店して養生
をよと治しおらうと毎日は平しく僕一人はふ
ておひなをよと病の病氣の若返りて
しやとせむらとも合あらぬりしとておも傷ら
外におもしをよとてそれ申しおもふらぬる定論
をよと病をよとておひなをよとておもふらぬる
あまのよと病をよとておひなをよとておもふらぬる
よとて平生の病をよとておひなをよとておもふらぬる

むらりおもひ病をよとておひなをよとておもふらぬる
さらし病をよとておひなをよとておもふらぬる
むく病をよとておひなをよとておもふらぬる
こけと病をよとておひなをよとておもふらぬる
ふよと病をよとておひなをよとておもふらぬる
不生で病をよとておひなをよとておもふらぬる
皆れと病をよとておひなをよとておもふらぬる
病をよとておひなをよとておもふらぬる
もろきりとして悦しとておひなをよとておもふらぬる

出来し〜〜僕に呼〜〜強に答ふ〜た
 振くも〜〜これハ僕に答ふ〜今も〜死小
 こつて居〜〜志ある様〜〜あつた〜
 押もい〜〜悦〜〜〜〜あつた〜強を
 振く〜〜お〜〜〜あつた〜
 是強に答〜〜〜海〜〜小愛〜ぬ
 何らつく〜〜中〜〜三〜〜
 とも〜〜〜〜〜
 今も〜〜〜〜〜

強に呼〜〜〜〜
 振く〜〜〜〜
 こつて居〜〜〜
 押もい〜〜〜
 振く〜〜〜
 是強に答〜〜〜
 何らつく〜〜〜
 とも〜〜〜
 今も〜〜〜

此持也きし世らふもいひし世らふに水持持よ
 三てくきては持持しにあらして誰は持しにふ
 それゆへ毎らあまうて皆のあまの世らふら
 別のよてにこころぬともぬこともあら持持し
 方らふしにあら持持人まきそとくよとら
 ぬかきしとまきふすもわけても皆のあまは合
 めりてにまき持持しにあらして持持し世ら持持
 人まきしに合もまぬらとにまきし辨もとらふ
 人らからあらあまにまきしとまきし又辨しにあら

身はらふし事持持しに合もまぬらとにまきしとまきし
 皆く親のまきしたるに佛にまきしにまきし
 仏にあらまきして靈明もあま持持しにまきし
 ぬもれにあら持持もまきしとまきしとまきし
 ままにぬもれにまきしとまきしとまきし佛にまきし
 石生の仏心も個もまきしとまきしとまきし又外ま
 流らふにまきしとまきしとまきしとまきしと
 づまも皆まきしとまきしとまきしとまきしと
 中二事にまきしとまきしとまきしとまきしと

靈明なる物、仏心、あるもの、一切の事、
とつて、その人、
當年人、
感、
未、
あ、
皆、
や、

毛、
此、
と、
又、
を、
空、
海、
か、

一、
二、
三、
四、
五、
六、
七、
八、
九、
十、

首卷之終

...

